課題名　　我が署における人材育成活動

所属　　網走西部森林管理署西紋別支署
氏名　　総務課長　国沢　修　・　技術専門官　貞廣　久男

1、課題を取り上げた背景

当支署の職員年齢構成は34歳以下の職員が11名で定員内職員の48%を占めます。現場経験の少ない職員への技術の継承と職員全体の知見・技術の向上を図ることを目的に支署内の勉強会を企画しました。

2、取組みの経過および実行結果

現場経験が少ないまま監督・検査業務に従事する職員が苦労している実態があることから、収穫調査と生産事業を主に取り組むことにしました。

1回目2回目は、森林・林業再生プランに基づいた、生産事業での「低コスト高効率作業システム」について座学と現地実習を行いました。同作業地では北見事務所主催の現地検討会が直後に開催を予定だったこともあり、支署職員の意識・知識の向上を図る機会となり、また、当該事業体では現地検討会のデモンストレーションとしても効果がありました。

3回目は、収穫調査業務が外部委託調査になり、職員が直接関われなくなっている現状です。森林経営の始めの業務としての収穫調査の意義を再認識し、基本と実務を経験談等を交えながら実践的な内容で学びました。また、治山工事現場では森林管理署としては珍しい海岸工事が当支署で行われていることから、その工事内容について勉強する機会を設けました。また、今年度より治山係に配置となった若手係員に説明役を担わせるなどして人材育成を少しでもと工夫しました。質問も多く有意義な勉強でした。

4回目は、これまで非常に少なかった主伐期を控えた人工林の次期施業の判断が近年増え始め、現場職員が苦慮していたことから、見方・考え方とその判断のポイントを現地実習で学びました。森林吸収源対策の対象箇所の判断と日頃の疑問などの相互理解を図りました。結果は、対象地の見方と考え方の流れはある程度理解されましたが、やはり、実際の判断には個別事案がそれぞれあり、画一的には判断しがたく、今後も個別の関わりを持ち続けながら、経験を積む手助けが必要です。

5回目・6回目は収穫調査の現地実習を行いました。伐区踏査・周囲測量・標準地調査、列状間伐調査の一連の作業を実体験しました。最終的には復命書作成・立木予定価格評定まで一連で行いたいと考えていましたが、実際はうまくいかず欲張りすぎた感があったと反省しています。焦らず来年以降継続して取組む予定です。

7回目は、若手からの要望もあり、広葉樹の落葉期の樹種名を正しく判別できるよう枝・幹・樹皮から判断する技術を身につける目的で行いました。元収穫調査経験者の基幹作業職員に標本の準備や指導してもらったり、名前の由来（北海道林業技士会作成の資料）や個々の特徴を強調し興味を持って覚えられる工夫をしました。今回採取した標本を整備して署内のロビー等に展示していつでも復習が出来るようにします。

8回目は、間伐ではあまり見られない広葉樹の長大径材の採材現場にて、欠点を判断しながらより有利に販売できる長径を決定する技術や、数字極印・エス管打ちの体験をしました。

特に今回銘木市に出品する素材はここ近年にないほどの珍しい品であり貴重な勉強会でもありました。

今年度残り期間において、各種工場見学を行い、当支署から出された材が、どのように製品化されていくか、川上から川下への流れを勉強したいと考えています。

3、考察

今年度は広く浅くといった内容での実施であったが、特に若手職員が色々な事項に対し少しは興味を抱く動機付けになったのではないかと感じており、来年度は今回の反省を踏まえつつ少しずつ中身の濃い内容となるよう実施して行きたいと考えています。

また、ベテラン職員が講師役となり勉強会を行うことにより若手職員とのコミュニケーションが深まり支署内の和にもつながったのではないかと感じています。

来年度は是非地域の中で一体的な森林環境教育活動を行いたいと考えており、そのための企画や事前学習・準備を地元の方々と一緒に取り組みたいと考えています。

そのような取り組みが職員一人一人の技術の向上につながり、地域における支署（国有林）の存在意義を深めることの原動力となることも目指し今後も引き続き継続した取組みとしていきます。